目次

立正大師の功勳……本多日生
菩薩行に就て……本多日生
實物集……平康頼
治法要旨……先儒遺稿
艮齋問話……安積信
聖地小湊のほとり……萩野慶三
聖訓摘要……本多日生
各地教信……

第三十三年八月號

社寺建築設計監督及臺灣檜材の安價提供
（三年以上水蓄乾燥材）

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及內務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

（充分なる水蓄乾燥をなしたる臺檜最も優良なるも水蓄不充分なる臺檜は于割狂ひ等の缺點多きものであります）

臺灣檜材ノ六大特徴

一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理整然木
六、木高雅色

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地
（明治神宮外苑內日本青年館正門前）
社寺工務所
（電話青山六〇二八番）

神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
（電話二二三〇番）

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
（電話西三二二四番）

昭和三年六月廿四日印刷納本
昭和三年七月一日發行（第四百號）

編輯兼發行人　東京府在原郡品川町南品川四百十二番地　小林順義
印刷人　名古屋市東區千種町字五反田五二番地　鈴木日雄
印刷所　東京府在原郡品川町南品川四百十二番地　三益社
發行所　東京府在原郡品川町南品川四百十二番地　統一發行所
振替東京五一〇七一番

不許複製

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓	前金
一頁	金拾五圓	金
半頁	金九圓	之
四分一頁	金五圓	事

統一定價

一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	前金
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共
		之事

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

四月發行　本多日生著

信仰修養、思想より論じたる

日蓮主義の本領

定價金貳圓五拾錢
五一一八頁
【送料十二錢】

目　次

（總の部）

一、信仰と修養と思想
一、信仰修養思想と立正大師
一、教育勅語の解釋と應用
一、思想の基準

（信仰の部）

一、眞の佛と眞の我
一、信心と正憶念
一、菩薩行

（修養の部）

一、新時代の婦人の修養
一、佛教の六善事
一、日蓮聖人の人格

（思想の部）

一、國と人と教
一、東洋思想の大共通點

以上

右は中央出版社の發行なるも統一發行所へ申込まるれば二割定價より割引する事となれり希望者は統一發行所へ申込まるべし

立正大師の功勳

本多日生

であるから西方十萬億の佛國を過ぎて向ふの阿彌陀樣一人に限つて、この世界の教主釋尊も捨てゝしまひ、日本の神樣も皆な捨てゝしまふといふことは間違つたことである。佛教の根本思想といふものは三寶に歸依すると同時に、諸天善神を包容して居るものが佛教である、佛教はさういふ狹隘なる思想を許さぬのである。中心はハッキリ釋尊に定めて、それから後は諸天善神であらうが皆これを包容して、梵天帝釋あらゆる婆羅門の神でも侮辱を與へないやうな組織になつて居る、頗る包容的なるものが佛教である。だから日本の國では日本の神樣も結構である、宗教の絶對の信仰を捧げる最後の對象は佛であるが、あとは部分々々の活動に依つて神樣といふものが働くのであるから、有難い所があるといふ風にして、先づ三寶を信仰の中心とし諸天善神の加護に敬意を拂つて行くといふことは、阿含の初めからちやんとさういふことになつて居る、それが佛教の特色である。

然るに彼等は單一神教を說いて釋尊を捨てたり、我國の神樣を蔑ろにしたりした、だから法然上人が死後その骨を堀返されて加茂川に曝され、『選擇集』は比叡山に於て版木を燒いて絶版を命ぜられたといふことは、日本の神樣を侮辱した罪に依つてやられたのである。それに違座して親鸞上人も越後に流された、そこで親鸞は僧と名乘ることをやめて、愚禿親鸞と名乘つたのである、それといふものは日本の

神様を無暗に捨てろ〳〵と言つたが爲である。今でもやはり日本の神様を拜んで善いか惡いか、彼等は問題にして居る、注連縄問題と言つて、眞宗の家では正月に門口へ注連縄を張るのでさへも問題にして居る、そんな事にまごついて居るのは滑稽なことである。

さういふ狹隘な信仰は日蓮聖人は許さぬ、聖人は本尊の中にも天照太神、八幡大菩薩を列記されるが如く、日本人である以上、日本の神様を疎かにする觀念があつてはならぬ、これは明瞭なことである。

併しそれは何も佛教の本來が單一神教であるのを、日蓮聖人が日本人なるが故にさうしたといふのではない、佛教の本來が六念法と申して、その中に「念天」といふことがある、即ち天を念せよといふことは佛教の原則として教へられて居るのである。だから日蓮聖人の勸請文に於ても『一切常住の三寶護法列位の諸天善神』とあるので、三寶と諸天善神といふことが簡單に言ひ表す信仰の對象である。それは各宗ともに皆な共通して居る佛教の原則であるから、日本の高僧で神様の守護を否定したといふのは、法然や親鸞のやうなものだけで、あとはそんな事を言うた者は無い。彼等が變な事を言ふから、そんな事は言はぬが宜しいと日蓮聖人が仰しやるのである、何も改革を說くのではない、向ふが餘計な事を言ふから、それはやめたら宜からうといふだけの話である。ところがこの頃になつて增上寺で會議を開いて、增上寺の和尙が代表して伊勢へ參詣をしたりして、彌陀と日本の神様との關係を少し緩和するやうな事をやつて居る。そんな事をして泥棒猫がコソ〳〵逃出すやうなことをやらぬでも宜い、今まで日本の神を侮辱した事が間違ひであつたといふことを悟つたならば、ちやんと男らしく前非を改めたら宜いのである。それは要するに宗教學上で言へば單一神教の思想に基く誤解であるといふことで、簡單にかたが

附いでしまふのである。

ところが尙ほその他に於て方面を異にして佛教の正統を亂すものがある。それは單一神教の反對に多神教といふものであつて、何でもかんでもダラ〳〵にやらうとする、眞言あたりの思想はそれであつて、多神といふよりは寧ろ萬有神教見たやうなものである。何でも拜む、雪隱へ行けば雪隱の神様があり、門口へ行けば門口の神様があり、竈には竈の神様があり、何でも皆な神があるといふことにしてしまつて、終ひには男女の男根女根見たやうなものを拵へて、そんなものまで拜むやうになつて居る。さういふことを眞言の系統に於てはやつて居るのであるが、これは婆羅門系統の思想である、印度の婆羅門教では、電信柱みたいなものにお面のやうなものをくつ附けて澤山列べて祀つて居る、それは牛の頭もあれば、馬の顏もあれば、蛙のやうなものもあれば何でも皆な神様になつて居る。さういふ思想がやはり佛教の中にも流込んで居るのである、日蓮門下にもその眞言を通して、婆羅門の影響が及んで居るから、今日能く調べて見たならば狐もあれば狸もあれば蛇もあるといふ譯である。

この思想は佛教の癲病系統の思想と名けて居るが、婆羅門から來たところの毒素である、釋迦如來の教はさういふ迷信的な狐や狸を拜むやうなことはしないのである。どんなに擴げても諸天善神といふ範圍に留めてそれで一括して居る。そんな一々の變なものなどを書立てることをしない、『護法列位の諸天善神』といふ程度に留めて居る。

眞言あたりは婆羅門式にいろ〳〵のものを拜む、隨つて今日日本人の信仰の全体といふものが殆ど多神教になつて居る「私は觀音様を拜む」「イヤ私はお藥師様」……「私は妙見様」……といふ譯で、慾張つた者は二つでも三つでも一緒にやつて居る。だから何處の家へ行つても神棚にはいろ〳〵なものがある、

金比羅樣のお札もあれば、お不動樣のお守もあればいろ〳〵なものがある。さうしてそれがどつちが上といふことは無い、餘計錢を出して買うて來たお札が大きいので、錢を少しゝか出さぬのは小さい、大きい方が何とはなしに利くやうに思つて居る。だから謂はゞ巡査が警視總監よりも上に座はるといふやうなこともある、位別などはわからぬ、雜然と神棚に列べてある。さういふ迷信的の事をやつて居るから、そこでこれを賣出す方でもその需要に應じて、お札なども立派に拵へて商賣式に發達して居るから、「五圓のお札はこの位」「十圓になるとこの位」……三倍も大きくなる。斯樣な雜然たる狀態は、どうしても宗教の所謂迷信改革といふことを日本では一度斷行しなければいかぬのである。西洋では基督が宗教改革を第一にした時に、左樣な所謂偶像といふものは皆燒拂ふことになつたのであるが、それは非常に善い事である、國民がそんな事に引掛つて居る間は本當の宗教はわからぬ。

故に日蓮聖人は左樣な雜然たる多神主義の佛教を否定して、如何に澤山の佛があり、神樣があつても、中心は釋尊から現れて來る、この釋尊は久遠の佛であつて、天の一月萬水に影を宿すが如くに、これは今夜のお月樣だと言つても、十年前のお月樣もこの月である、百年前のお月樣もこの月である、東京を照して居るこの月が嚴島を照し、ナイヤガラの瀑布を照す、何も百年前の月だの、ナイヤガラの月だのと言つて、今日今夜東京を照して居る月の外にあるべきものではないといふことに依つて、澤山の神や佛を認めながらも中心を現在の釋迦牟尼に置いて、さうして統一神教といふものを教へられたのである、澤山にはたらいては出るけれども、中心は一つである。

その統一神教といふものが佛教の正統思想である、佛教を研究するには、淨土門式の單一神教であるか、

眞言式の多神分裂であるか、日蓮の唱ふる統一神的の思想であるかといふことのその優劣を決しさへすれば宜いのである。日本人はそれに依つて自分の向ふ所をきめれば宜い、その問題に入つて來ないといふのは日本人の思想、宗教觀念といふものが幼稚ナンである。だから幾ら言うても判らない。それを問題にして基督教なら基督教は、日本人を救ふには唯一神教でなければならぬといふ立場から日本に向つて傳道に來て居る。私は或る基督教の神學者に話したことがあるが、「この佛教の統一神教の思想は基督教の唯一神教よりも善からう」といふことを言うたところが、「それは善いといふことを認める」と言ふ、「それならば基督教などを弘めなくても宜いではないか」と言ふと、「オーキにさうだ、そんな事を知らなかつたからやつて居るのだけれども、それがわかつたら引上げても宜い」といふことを正直に言つた。日本は多神教のやうな婆羅門のやうな宗教的態度を執つて居ると思ふたから、唯一神教を以てそれを救はふと思つて基督教徒はやつて居るのであるといふことを言つて居つたが、どうしてもさういふ條理のある意味に依つて、將來は國民の信仰問題は解決されて行かなければならぬ。

その場合に日蓮聖人は、統一神教が佛教の正統思想であるといふことを主張したものである、それが爲にいろ〳〵雜多のものを中心にして信仰したりすることを否定したのである、何も喧嘩が好きでやる譯ではない、それがきまらぬければ佛教の立場はきまらぬのである。今の日本の政治家や學者は「そんな宗旨の事などは言はぬでも宜いではないか」と言つて居るが、それがきまらなければ——佛教の立場が多神教やら單一神教やら統一神教やらきまらないで、信仰が出來るものではない、さういふ大雜駄の事を言ふのは素人のことである。「そんな氣の狹いことを言ふな」といふが、その氣の廣いといふのが危

ぶないので、縮が弛んで居る、宗教の事がわかつて居ないのである。

西洋の人は宗教に就てはちやんとその大事な點が能くわかる、だから西洋から佛教の研究に來る人があるが、その問題に入つたならば非常に熱心に研究する、さうして吾々の話を直ぐ領解して、「成程さういふ立場に日蓮主義はありますか、それは將來の宗教として大に意義のあることであります」と言つて、基督教の人でも直ぐそこは領解するのである。日本人はその點が實に漠然として何遍言うてもわからぬ、日蓮門下の人でもまだ自分の主張が何だかわかつて居ない。「ヘイ、こつちは南無妙法蓮華經です」とやつて居る、「南無妙法蓮華經とはなんだ」「なんだと言つて南無妙法蓮華經……」まるで魚屋の阿哥連が豆絞りの手拭の鉢巻で言ふやうなことを大道場でやつて居るのであるから、呆れて物が言へない。宗教の信仰意識といふものを、世界的に論議されて居る法式に依つて考へて行かなければならぬ、それを「宗教學ナンといふものは西洋で言ふことだ、そんな事を言ふのはお祖師樣に相濟まぬ」などといふ無茶な事を言つて居る。

さういふ次第で日蓮聖人の四箇格言の如きも、やはり佛教の正統思想擁護の戰ひである。禪宗が天魔と言はれたのも、自分が即佛だといふやうな慢心になつて、釋尊に對する尊敬心を失つたからして、そこで慢心の天魔として「禪天魔」といふことが出て來たのである。「眞言亡國」といふことも、釋尊を中心として行くべき所に二佛が出て、大日の方が釋尊より偉いとか、或は雜多なものを祀つて釋尊中心の信仰を亂すとかいふことが、やがて國民道德の上に中心を亂すことになるといふ點に於て眞言亡國と言はれたのである。「律國賊」といふことも、唯だ戒律の末に拘泥して根本の思想を忘れた、佛教で戒律を立てた根本精神はモツと大きなものである、後の律

宗の人が言ふやうな小さな律法に拘泥して居るものではない、モツと大きな精神がある、その根本を忘れて小さな形式の律法に囚はれて行くから、日蓮聖人はそれを攻擊したのである。斯の如く四箇格言の精神を味つて見ると、何れもそれは佛教の正統思想に引戻す運動であつたのである。それから天台の觀念觀法を改めて信念主義の行き方をなさつたのも、やはりこれは佛教の根本精神である。佛教は阿含の初めから涅槃の終りに至るまで信仰中心の教である、天台の觀念觀法のやうなことが決して佛教の根本精神ではない。それは佛教では智慧を尊ぶけれども、併しそれはあゝいふ坐禪觀法をするやうな意味の智慧とは違ふ、佛教に於て一般に言ふ智慧といふものは、誰しも一通りの考さへあれば領解の出來るところの信解を說くのである。別に面倒な行をしなければわからないといふやうな超越的な知識を言ふのではない、一般的な堅實な信解を指して佛は智慧といふ言葉を使つて居られる。だから何人にも領解されるやうになつて居るので、佛教の智慧は坐禪などをしなくてもわかるのである。

それはどういふことかと言へば、大体は人生の有爲轉變の有樣と、それからその奥の常住不滅の心の意味合と、この點を了解することである。人生は有爲轉變、遷り變つて行く、人間は死んで行く、併し靈魂は死なぬ、花は散つて行くけれども又來る年毎に開く、そこに變遷あるやうにして變遷の無い一つの大きなものがある。宇宙はその變る方から見れば一瞬も留まつて居ない、變らない方から見れば萬劫不變なものであるといふ意味合を掴ることが智慧である、それだけは一人前の人間の常識として考ふべきことである。それは何事に就てもわかる事で、變る方から見れば時々刻々變遷を免れないけれども、變らない方から見たら千年萬年變らないものがある。その場合に多く遷り變る方に心を執はれて、變らな

い方を忘れて居るから、そこを佛教は誡めるのである。その一つ〳〵消え去つて行く生滅の側に力を入れて、永遠の少しも滅びない價値あるものに對して忘れて行くといふのは、ちようど結構な珠を捨てゝシャボン玉に執着するやうなものである。水晶の珠を捨てゝ直ぐ消えるシャボン玉の方が大事ぢやと言つて夢中になつて行く、さういふ傾向を執るから、そこを佛が誡められたのである。

それだけの事は落着いて考へさへしたら、どんな無學な者にもわかる譯である、酔ばらつて居てはわからぬ、フワ〳〵して居つてはわからぬが、落着いて一服吸つて、張面も算盤もそつちへ除けて、さうして胸に手を置いて目を瞑つて考へて見たならば、「成程人間は不滅のものを忘れて生滅するものに力を入れて居るナ」といふことが能くわかるのである。それは考が足らぬぞといふ警告を與へられたのであるから、天台大師などがあのやうに七面倒くさく言ふとわからなくなつてしまふけれども、その事は誰にも一般的に考へられなければならないのである。

「いろは」歌にある通りのことであつて、『我が世誰ぞ常ならむ』といふこと、『有爲の奥山けふ越えて』といふこの點である。『いろは』歌がわかればモウそれで宜い譯である。誰にも「いろは」歌がわからないといふことは無い、花は散るけれども又咲く、人間は死んでも又生れて行くところの生命は續いて居るものである。櫻の技葉は枯れても根が殘つて居るから、それが又芽を吹いて花が咲いて來るやうに、滅び行く側と滅びない側とあるといふことを知つて居らなければならぬ、枯れて行く方ばかりに力を入れて、永遠に續いて行くものを忘れるのは愚かな事である。

だから法華經を修行するにしたところが、幾ら山の中に入つて樹の下で坐禪觀法をやつて見たところで、今言うたより外に出て來はしない、十年やつても二十年やつても同じ事である。それを山へでも入つてやつて居ると何か特別のものを得たやうな顏をして出て來る、世間の人も何かえらい事が聽けるだらうと思つて集つて來る、「それはお前、いろは歌にある有爲の奥山けふ越えてといふ、あすこぢや」と言つたのでは、サツパリ十年も山で修行した甲斐が無いから、「それは違ふ、有爲の奥山などは入口ぢや、その奥の又奥がある」といふやうな譯のわからぬことを言ふ、同じ事を勿体を附けて、「そのモウ一つ奥だ」と言つて、「それはお前達は行かないからわからぬけれども、俺は行つて來た」……、斯う言ふと大變えらいやうに聞えるので、禪宗の悟りなどゝいふのは皆なそんな事である。その證據はちつと見て居ると直に喧嘩を始める、さうするとやはり同じやうにつまらぬ喧嘩をして居るから、やつぱり彼等は奥へも入口へも行つて居ないといふことが能くわかる。少しも悟つては居ない、やはり鰐の頭を圧へて喧嘩をする時には、裏のドラ猫も相違はしない。人間といふものはそんな事を少しぐらゐやつたからと言つて、それは道德修養の上の人格といふものは磨き得られるけれども、智識の行止まる所といふものは大抵きまつて居る。　永續

一、ますらをはいはでやむべき法の爲
　　國の爲にとおもふ誠を

一、小松原あらしにまぢる血の雨の
　　君が首途は雄々しかりけり

一、鎌倉の空かきくもり龍のごと
　　君あらはれぬ安房の空より

（荻野慶三）

菩薩行に就て

本多日生

それから三寶の恩は、天地の恩が三寶にうつるので、これを天地の惠みとして考へれば、天の光を受け、或は天地の間の惠みに依つて人畜草木が棲息して行く、それは非常な大きな力である。人間は人間だけで生きて居るものではない、無論米を食ひ水を飲んで居るが、さう考へなくても、一切の人間の身体そのものが天地に依つて與へられて居る、自分の身といふものは髪の毛一本もありはしない、皆な天地にありしところの物に依つて出來て居る、この肉体といふものは天地間に存在する物質に依つて組成せられて居るもので、自分のものと言つたならば恐らくは霊魂だけである、さうすれば相もなければ何も無い。一切の天地のものゝ中に吾々が生命を宿し、さうして天地に依つて吾々の身体は動いて居る、少し寒くなつて來れば顔へ上つてしまふ、少し氣候が變化すれば風邪を引く、天地の惠の中に生存し、その天地の恩を受けて居る。これを能く考へて行くといふと、天地の精神を代表するところの偉大なる人格者を認めなければならぬ。廣く考へれば天道であるけれども、これを具体化すれば神様佛様となつて來る、それを佛教では三寶といふのであるが、その中心は佛様である。その佛の有難い事、佛の教に遵ふこと、その教を擴げ護ることに賛成を表して行くといふことが三寶に歸依するといふことである。三寶に歸依すると言へば佛に精神を捧げるといふこと、法といふのは教であるからそれを遵守すること、僧

といふのは與に修行し俱にその教を護る活動に參加するのである。佛法僧の三つを向ふに置いて、南無釋迦牟尼佛、南無妙法蓮華經、南無日蓮大聖人と言はなければ三寶に歸依した事にならぬ……といふ譯のものではない、日蓮聖人は吾々の先輩として、吾々はその事業に參加して、日蓮の爲したる事業に加つて行くのである。三寶歸依の法式はさういふ風になる、その事もちやんと說いてある。唯だ好い加減に出鱈目を言ふからわからなくなるのである。三寶世に出でゝ吾々を救濟なされるがその根本はたゞ一佛寶である、その一佛寶が樣々に身を分けておはたらきなさる、譬へて見れば日天子が百千の光を放つて世間を照すが如きものである。百千の光と言つてもお日樣が百千あるのではない、けれども田圃も照して居る、仕事場も照して居る、屋根の上でも部屋の中でも、針仕事をして居る所でも、本を讀んで居る所でも、總ての所を照されて居る、その光は一つのお日樣に依つて與へられて居る、それを千光を放つと言ふのである、佛教が樣々な人の心に光を與へても、それは一つの佛樣の光である、これを見ない人は唯だ盲だけである。それから法の尊いといふのは、教の法、理の法、行の法、果の法といふ四通りの事があるけれども、主として今言ふのは教の法である、理は教の中に入つて居る、行は教に導かれるものであり、果は行の結果をさとり上げた即ち佛を言ふのであるから、三寶の中の法といふものは教法である、その教を大切にするといふことは、たゞこれを拜んだり、讀んだりするのではない、その教へられて居る事に遵ひ、それを行うて行くことを法供養と言ふのである。教といふものはもと釋尊が說法をなさつた、その通りに口眞似をしろといふのではない、汝等能く聽けといふ經文を、坐睡をしながら「汝等能く聽け」と讀んで居る、そんな事をするのではない。お經といふものは今まで漢文をその儘讀ん

で來た爲に、聞いて居つても譯がわからないからこれでもおかしくないやうであるが、これを日本人にわかる文句にしたならばどうであるか、たゞお經といふものは讀んで居つたら宜いものぢやといふのは實に滑稽な事が直ぐわかる。お前等佛敎を信ずる以上は解けないで朝早く起きろといふやうなことがある、それを朝早く起きないで十時頃に起きて來てお經だけは「朝早く起きろ」と讀んで居る、晝間は坐睡などをして居つてはいかぬといふ經文を、坐睡をしながら讀んで居ると言つたならば、實におかしい事ではないか。敎といふものは、その事は斯うせよ、この事は斯うせよといふことが大体の趣意のものである、それを漢文であるが故に、ジャブ〳〵やり出した譯であらうが、たゞジャブ〳〵で何時までも押通したといふことは大失態である、何時までもわからない儘で佛敎を押切つて行くといふやうな事があるべきものではない。わからぬければ日本人にわかるやうになほすかといふことは最初の間の議論である、何時までもそれにひつかゝつて、「わからぬけれどもジャブ〳〵で行かう」「それで宜からう」といふ、その解け根性といふものは許さるべきものではない。それは漢文でも、非常にえらい人で、無點でその儘讀んでも意味がわかる人ならば宜い、ちようど英語の出來る人が、英語を譯さないでその儘で行かうといふ論者と、譯さなければわからないといふ論者があるが如きものである、佛敎在來の坊さんは、譯さないで行かうとする方が何となく氣が利いて居るやうに思つて居た、ちようど英語の演說を通譯無しで聽くと言へば、えらい英語がたつしやなやうに聞えるといふやうなもので、お經も一通り研究をした者は「爾時世尊從三昧……それでわかつて居るではないか」と言ふ、それでわからぬと言へば何か無學のやうに見えるものだから、默つて引込んで居る。終ひには一般の信者はそんな考も無く意味も何にもわからないで唯だ「爾時世尊ジャブ〳〵……」とやつて居る、これは問題にならぬものである。譯さないでわかるやうにして行くか、わからぬ所はどこまでも譯するか、どちらかにしなければならぬ、であるから簡單に申せば、敎はその說いてある通りに遵ひ之を守つて行く事である、斯う考へれば宜い。

僧はどういふ風に說いてあるかといふと、僧には三通りある、菩薩僧、聲聞僧、凡夫僧といふものがあつて、それはいづれも「正法を宣べて一乘を讃歎する」と言つて、如來の正しき法を宣傳してその一乘の意味合を世に弘めて行くところの人である、さうして因果應報の理や、善き人間の志を促して、惡い事をせぬやうに世の人を導いて行く、その活動、その仲間に入つて行くといふことが僧伽に歸依するといふことである。坊さんを向ふに置いて坊さんに頭を低げるといふことではない、僧伽を坊さんと思ふのは間違つて居る、僧伽は衆といふことで、正定聚といふ正しき團結の全体を僧伽と言ふ。この中には敎へる人もあり、信ずる人もあつて、與に俱に力を協せて行くので、佛敎を專門に學ぶ者あり、又それを聽いて社會的に活躍する者あり、一方は專門に調べる、一方はそれを學んでその信念に依つて、各々の職業を通して菩薩の精神を活躍させる、又寄つては敎の話を聽く、こつちは牡丹餅を持つて行く、こつちは敎の話をするといふやうに協力して行く、その全体を僧伽團と稱するのである。それをお經は坊主に讀まして置け、信者はボカンとして煙草を吸つて居る、それは佛法ではない。さういふ子供の玩具のやうな事も、泥棒をする程の惡い事も無いかも知れぬが、も早や世の中はさういふ事を以て經過し得べき時代ではない。佛法の興隆に就いて考へても、社會の現狀に就いて考へても、そのやうなことを以て日を送るべき時代ではない、どうしても佛敎徒が覺醒して、それは小部分のものではない、佛敎の眞

の俗、又何等か釋尊の御恩に感激して居る者が本當に覺めて、一は如來の御恩を報せんが爲に、一はこの世の中の頽廢を救はんが爲に努力しなければ嘘である。

それが三寶に歸依するといふことなのである、即ち一言にして申せば佛樣を念じ、佛樣の敎を尊守し、その佛敎の活動の中に協力して行くといふことである。

さういふ風に四恩を報じて行くのが即ち菩薩行なのである。

以上は心地觀經に說かれた四恩の說を大体御紹介したのであるが、尙ほ佛の報恩といふことに關してお說きになつて居ることをいま少しく申して置きたいと思ふ。それは大方便佛報恩經（大藏經第十二套ノ一冊）といふお經がある、この經の精神は佛が報恩といふ事に關してお說きになつたのである、佛の恩を報するといふことも說いてあるけれども、たゞ佛の恩だけではない、佛が敎へられる佛敎の報恩の精神を說いたのである。表題は佛報恩經とあるから、佛だけの恩を報ずるやうに見えるけれども、さうではない、佛が敎へる報恩の意味は斯うだといふことを說いたお經である。

佛の敎へられる報恩といふことの第一はやはり父母の恩である、眞宗や何かで報恩講と言つたら親鸞上人の事だけである、或は御恩報謝と言つたならば阿彌陀樣の事だけであると考へて居る、それは間違つて居る。前にもあつた通り、父母の恩を報ずればそれは佛に供養すると異なること無けんといふ、その世間及び出世間、有恩の處を偏らずに心得るといふことが佛敎の原則である。佛敎を信じたら佛の恩だけ……、世間は親の恩だけ……斯う二分するといふことを佛敎は反對するのである、世間の人も父母の恩と佛の恩を併せて考へなければならぬ、佛敎で敎へることも又偏つてはならぬといふことが大事である、それであるからその意味を徹底する爲にこの佛報恩經の大意を御紹介しようと思ふ。

佛が王舍城の耆闍崛山に於て御說敎の際、或る朝阿難尊者が王舍城に托鉢に行つた。その城中に於て有名な大薩遶といふ婆羅門の先生に出會した。ところが大薩遶が釋尊を攻擊した、その攻擊は、ちようど今の日本の破佛家が考へて居るやうな意味合のことを申すのである、佛は親孝行といふことを知らぬ、親が嘆いて居るにも拘らず、默つて迦毘羅衞城を捨てゝ山に入つたといふのは恩を知らない不孝の人であると言つて、いろ〳〵それに附加へた理窟を以て攻擊をしたのである。その大薩遶の攻擊を阿難が聽かれて、歸つて來てその事を釋尊に申上げた。さうして阿難が言ふには、「佛敎の中に於て父母孝養に關する敎はどういふことになつて居りますか」と聽いた、無論阿難も知らぬことはなかつたであらうけれども、話の順序で先づ斯ういふ問を發した、これは初めて佛が說かれる譯ではないが、文章の順序であらうと思ふ。その時に佛が仰せられるに、「誰が汝にそのやうなことを言つたか、佛は親不孝のものだといふやうなことを誰が言つた」阿難が答へて「それは六種外道の一人薩遶尼乾子であります」、その時は釋尊はニッコリお笑ひになつて、さうしてその口中より美しき光が出て東の方の世界を照された。その時に東の方の世界の佛がその弟子達に話された（これは佛敎の說き方は能く斯ういふ話が出て來るのであるが、光に照された世界の佛が話をするといふことになつて居る）これから西の方に娑婆世界といふ世界がある、その中に今佛が出て說法をせられて居る、その佛の名前は釋迦牟尼如來といふのである。大勢の人の爲に大報恩經といふものをお說きにならうとして居る、それは菩薩をして遠に菩提を成就し、また佛の恩を報せしめんが爲に、又一切衆上に恩といふことの道德を知らしめんが爲に、又その報恩の

德に依つて彼等が苦惱の海を越えるやうにしようとして、第一父母孝養の事柄をお話にならうとして居る、その因緣に依つて今斯の如き光を放ち給うたものである、斯ういふ風に東の世界の佛が話をされた。尙ほ附加へて言ふには、釋迦如來は非常にえらい方で、吾々のこの淨土の世界と違つて、大悲の願力强きが故に、彼の佛は娑婆世界のやうな穢惡の國土に出て、その中に居る人間は煩惱五逆、いろ〳〵の罪惡に滿ち〳〵て居る敎化のしにくい人達である、それを特に利益するが爲に娑婆世界に出現せられた、今も或る婆羅門の反對に逢うて、その婆羅門の疑を正すべく報恩のお話をなさらうとするのであると言はれた。それから又釋迦如來の光が南の方を照した時にも、やはりその南の方の世界の佛がいろ〳〵釋尊の有難いことを話した、今度は又西の方の世界を照した時にも、北の方の世界を照した時にも、皆なそれに似たやうな話があつて、釋迦如來の有難いことと、さうしてそれは結局一切衆生をして父母の恩、師匠の恩、その他の重き恩を知らしめようとて今御說法をなされつゝあるのだといふことを申すのである。これが佛報恩經の第一になつて居る。

阿含正行經

人癡なるが故に生死あり、佛を見て問はず、經を見て讀まず、沙門を見て承事せず、道德を信せず、母父を見て敬はず、世間の苦を念はず、泥犂の中の考治の劇きを知らず、是を名けて癡と爲す。

寶物集

平康頼

六、子親を救ふ

猶々重ねて申すべし、秦の良郭と云ひし人と、阿用子と云ふ者と、二人を炎魔王宮に召し置れて、罪の重き輕きを正されけるに、良郭は子を持ちたる者也、冥途を弔ふべき人ありとて差し置かれぬ。阿用子は、弔はるべき子なき者也とて、忽に地獄へ落されにき。又佛阿難を具して、道を行き給ふに、淺間しき餓鬼の、心地能氣にて舞ひ樂むありけり。阿難佛に是れを問ひ奉りけるに、佛告げて言く、是前世の罪惡に依りて、淺間敷き餓鬼の報を受けたりと云へども、產める所の子善を修する故に、樂を得るぞと言ひける。加之大目犍連尊者は母の靑提女が飢を助け、淨藏、淨眼の二人の子は、邪見の莊嚴王を導きて、菩提の道に入れたりき。大目犍連は、母の餓鬼道に落ちたりしを救はんとて衆僧を供養す、彼施の力に依りて、母の飢を助けし事也。細には『盂蘭盆』經に見えたり。又妙莊嚴王は、邪見なりしかども、淨藏、淨眼二人の子、樣々の謀を廻らして、佛の御所に具して、參りてありし事也。細に『法華經』に見えたり。現世後生の孝養此の如し。加之又能子を持ちたる人、子に引かれて寶を持ちたりと見ゆる事多く侍るめる。班固が『史記』を書きさすを、班彪是れを書き繼ぎぬ。佛は涅槃に入り給ひしかども、羅睺羅其迹に法を崇め給ひき。文王は武王を儲けて國を靜かにし、月光王は子なくして蹄を

失ふ。此故に優闍大王は多門天王に祈りて、天王の額より王子を出し給へると侍り。

七、子は仇敵

又傍なる人の聲にて、人の心は面の如く、必ずしも人毎に孝養なし、誤りて子は親の爲に敵となると云ふ事も多く聞え侍り。少々其例を申すべし。小野宮殿宮頼公の御子に、敦敏少將とて、母は本院大臣時平公の御娘の腹にて、類ひなく思ひ給ひしに、父大臣より先立ち隱れ給ひしを、いみじう思し歎く事限なくありし比、陸奥に侍りける仕人の、是をも知らで、少將君の御許へとて、馬を參らせたりしを見給ひて、かくぞあそばしける。

◎まだしらぬ人も有りけり東路に、
　我も行きてぞ見るべかりける。

上東門院の女房に、小式部内侍とて、いみじく時めきて、萬人の心を盡す女ありけり。二條殿の數通の御思人にて、もてなし給へるが、墓なく失ひければ、母の和泉式部が嘆きける事、さこそ侍りけめ。院も最愛く思召けるなんめり。失にしかども、狎給ひたる事なれば、絹を遣されたるに、小式部内侍と云ふ書付の札の有るを見けるに、今更にかきくらす心地しければ。

◎もろともに苦の下には朽ちずして
　埋れぬ名を聞くぞかなしき。和泉式部

又後江相公朝綱の、兵部丞澄明に後れて、一國中は花相傳へんとするに、主失せ給ふと悲み江中納言匡房の、加賀權守隆兼に別れて、九代相傳の文書、誰にか傳へんとすると嘆きし、子の誤つ事はなければ、親に物を思はすれば、敵なんど申さんも、僻事には有らじ物を、佛の御子善星比丘の、佛の歩み給ひたる御足の跡に、虫を拾ひ置きて、佛は物を殺すをば制して、虫を多く蹈みつぶし給ふぞと語り歩きける。加之『仲文章』と云ふ文には「朝

晡父を打ちしかば、靈蛇其身を焚ふ、百夢母を罵詈しかば、天雷其身を裂く」なんど申しぬれば、父を打ち、母を罵る者も有りけりとぞ聞ゆる。是れ迄は やさし。又摩訶陀國の阿闍世大子は父の頻婆娑羅王の、遲く死に給ひければ、疾々殺して我國の政を執らんとて、高籠に籠めけるを、母の韋提希夫人の、瓔珞の中に蒲桃の漿を盛れて、籠を守る者に乞ひ請けて、大王に嘗めさせ給ひけるを聞きて、安からぬ事に思ひて、又母の韋提希夫人を殺さんとしければ、耆婆、月光と云ふ二人の大臣、是を見て云はく、「劫初より已來、父を殺す惡王は一萬八千人たりと云へども、未だ母を殺せる者は一人も聞かず。母の命を生け給はずは、二人の大臣仕へ奉るべからず」とて制しければ、母の命計りをば生けてとぞ云へる。又唐の玄宗皇帝の、楊貴妃と申しける后に思ひ付きて、國の政をば楊貴妃の兄、楊國忠と云ふ人に預けて、朝政どもしたまはざりければ、安祿山と云ふ人、此事を憤りて、數萬の兵を纂めて楊國忠を殺しつ。此事の源を云へば、楊貴妃の科也とて、楊貴妃をも殺しつ。此の間には心憂く悲き事ども多く侍り。『長恨歌』と云ふ文に、細には申したり。源順が、八月十五夜に雨降りて月朧なるに、六條の宮に參りて、詩を作りて侍るにも、物戀心苦しきためしにぞ申して侍る。其詩に。

楊貴妃歸りて唐帝の思。李夫人去りて漢土の情。

と作れり。又此事多く歌に讀めり。少々申すべき也。

◎思ひかね別れし野邊を來て見れば、
　足立原に秋風ぞ吹く。源道濟

◎幻の傳に聞くこそ悲しけれ、
　契りし事は夢ならねども。藤原爲忠

詩の末に、次の李夫人の事を讀みたる歌、一首申すべし。

◎無影を石に移して見てしなを、
　又逢難き嘆をぞする。覺蓮法師

安祿山は、祿國忠を討ちて、玄宗皇帝を押籠め奉りて、天下を宰り侍りけるに何事か侍りけん。安慶緒と云ふ子に殺されたり。安慶緒をば、央師明と云ふ者殺しつ。央師明をば央朝義と云ふ子殺しつ。是等を承る時は、人の子親の爲に寶と思ふべからず。又佛阿難を具して歩き給ふに、恆伽河の邊に、形ち好き女人の悲泣する事ありけり。阿難怪んで佛に問ひ奉る。佛阿難に告げて言く。『此女形は目出度しと云ふとも生る所の子罪を作る故に、生み置きし母罪を盛に得て、憂惱する也』と言ひける。後世にも又子を以て寶とすべからずと見えたり。されば經文に、人子の爲に罪を作りて、惡道に落ると說きたり。是を思ふには、子も欲しく侍らず。

八、壽は第一の寶か

只命に過ぎたる寶なし。先一つの證據を申すべし。昔玄弈二歳と云ふ人、佛法東漸のために、春秋寒暑を送る事、一十七年。耳目の見聞する事、百三十餘國、五天竺を廻りてありき給ひしに、盜人に値うて多くの物を取られぬ。月氏國の人、纂りて訪ひ奉るに、少も嘆き給へる氣色もなく、何に多くの物を盜まれて御座すに、嘆きの色も見え給はぬぞと申しければ我命と云ふ第一の寶を盜まれず。されば嘆きと思はずと答へ給ひける。然れば命を寶と云はんには僻言にあらず、箕子が五福を尋るには、命を以て寶とす。僞れる狐の命に及べば走る。鮎が王の鈴に怖しも命を惜むが故也。阿鼻地獄の衆生すら、命の盡るは惜き事にてぞ有りける。爰を以て「壽最品」には久遠實成と、壽の長き事を說き給ふ也。假に栴檀の煙と上り給ひしかども、實の靈山に月朗か也。中々細には申さず共、讀み顯したる歌あり。歌にて申すべし。

◎浦山し心の雲や晴ぬらん、
　鷲のみ山に照る月を見て。藤原ともとし

◎鷲の山隔る雲や深からん、
　常にすむなる月を見ぬ哉。康資王母

◎あやなくに雲隱ぬと見し月の、
　鷲の峰にはすまぬ夜ぞなき。朝日の尼

◎世間の人の心の浮雲に、
　空隱れする有明の月。登蓮法師

張騫が、漢武帝の使にて、天河の水上を尋ねて歸り。劉晨が、仙家に行きて、頓て歸るとは思ひけれども、七世の孫に値ひしも、皆命の有りし故也。されば堀内右大臣の歌に。

◎逢迄とせめて命の惜しければ
　戀こそ人の藥なりけり。

と讀み給ふ、仙家には紅の雪を服ひ、紫の菊を飲み、命を寶と思ひて齡を延ぶる事也。詩歌を以て少々申すべし。

◎色ありて分け易し殘雪の底、
　心無くして辨へ難し夕陽中。

◎霑て干す山路の菊の露の間に、
　學が我は千代を經ぬべし。素性法師

此歌は、仙宮の菊を讀めり。是れに付いて祝ひに寄せて讀めり。

◎君が代の長月にしも白菊の
　咲くや千年の初め成るらん。法性寺殿

◎紫に八入染めたる菊の花、
　移ろふ色と誰か言ひけん。藤原義忠

奏皇漢武は、命を寶と思ふが故に、不死の藥ありと聞きて、方士を以て年々に遣す也。「海漫々、風浩々、眼穿なんとすれども蓬萊島を見ず」と、白居易の樂府に書き給へるは是れ也。桓帝は、命を延べんがために、韓康が長安の市に出て、藥を賣りしをば、車を遣して迎へし也。竹田の千次が、助老延齡の文を守りて、枸杞を好みしは、命を寶と思ひし故也。漢家本朝の人、誰か壽を寶と思はざるや。都べて娑婆世界にある有情の類の壽を惜ぬはなし。されば萬藥しげき中に、何か萬歳を祝ひ、千秋を祈らぬは

有る哉。天照大神の天の岩戸を開き給ひし昔の歌に、萬の神達を集めて歌ひ始め給ひたる神樂にも、千秋萬歲と云ふ所侍り、清見原天皇の行ひ始め給へる豐明にも、雲の上人心を一つにして、先づ萬歲、千秋の句をこそ詠じ給ひぬれ。神樂五節の事は歌にも讀み侍りき。

◎明けぬ夜の心ながらにやみにしを、
　朝倉と云ふ聲は聞きや。讀人不知

◎朝倉の聲こそ空に聞ゆなる、
　天の岩戸も明けやしぬらん。藤原致時

◎榊取る庭火の前に降る雪は、
　面白きとや神も見るらん。河內

五節の歌の中に

◎足曳の山あひの水の氷れるを、
　いかなる風のとけるなるらん。實方中將

九、壽必ずしも實にあらず

『萬葉集』より已來、家々の集、所々の打ち聞きにも、祀ひ歌と申したるは、皆君が代の久しかるべき事をのみよめり。實に誰も命を惜みければ、命こそ寶と聞き居たる程に、聲少し訛りたる者、法師なんめりと覺ゆるが、片角より懸り指出て云ふやう、「壽を寶と申す人もあり。又無下に寶とも思はぬためしも侍べり。或は等閑の一夜の宿と、世に命を替へ、或は化に散る花の匂にかへんと云へる人もあり。又身には病の嘆きある人の、年老ひたる哀れ疾して死なばやなんど云ふめり。皆人ごとに必ずしも命を惜み、寶と思へるものなかんめり。是も其證歌を以て申すべし。

◎命やは何ぞと露の化物を、
　値ふにし替へば惜しからなくに。紀友則

◎變ひ死なん命は事の數ならず
　强顏き人のはてぞゆかしき。永緣法師

◎櫻花命に替ふるためしあらば、
　いきて散るをば嘆かざらまし。源通親

壽を寶と思はぬためし、尙々申すべし。秦の始皇六國を打ち隨へて侍りしに、燕の太子丹を召し籠めて置きたりけるが、暇を乞ひけるに、責めて取らせんがために、馬に角生ひ、烏の頭の白く成りたらん時、邊を取らせんと云ひける程に、先づ烏の頭白く成りたりければ、驚きて暇を取らせてけり、燕丹我國に歸へりて敵秦皇を伐んと思ふ志深くして、荆軻と云ふ兵に云ひ合せてければ、毒龍の劒と樊於期が頸だにあらば、討たんと云ひければ、樊於期自ら頸を切りて、荆軻にかすと云へり、壽を寶と思はんには、自ら頸を切りて人にかすべしや。烏の頭の白く成りたりし事は、歌にも讀みたり。

◎山烏頭も白く成りにけり、
　我歸るべき時やきぬらん。僧基法師

命の寶ならぬためし、亦申すべし。猿澤の池に身を投げし采女又生田の川に身を沈めし女『源氏物語』には行末なく空の煙と登りし人、『狹衣の物語』には、早瀨の底のみくづと成りし人、此等を思ふも何等は命を寶と惜みける。去るは秦老國と云ふ國には、命長き者をば、他國へ流し遣はす也。實に命は長きも短きも生死無常は只同じ事也。

軒轅世を治む運一百回、登霞して駕留まらず。鬱頭天に生じて期八萬劫、始終哀み免れず。爰を以て、天笠の輔相の子は疾く生を替へんために、海に入りなんどしけり。加之心ある人は、皆壽を寶とするためしは見えず。世親菩薩は、壽盡る時歡喜すること、猶ほ衆病を捨つるがごとしと敎へ、釋尊は、我れ身命を愛せず但だ無上道を惜しむ。と說き給へり。此心の歌、一兩首申すべし。

◎惜めども惜み遂ぐべき命かは、
　身を捨てゝこそ身をば助けめ。讀人不知

◎さらず共幾世か今はさは憂きに、
　替へたる命何と思はん。藤原經家

◎假初の憂世ばかりの戀にだに、
値ふに命を惜みやはする。勝命法師
されば命を寶と思ふべからず、倩思ひ解くに生々の寶には佛法と申す物こそ、いみじき寶にて侍れ」とぞ申しける。此上に又何なる申す者やあらんと、聞き居たる程に、大方世間靜まりかへり、御堂の內鳴を止めて、音もせず侍りき。

寶物集第一終り　（次續）

守護國界主經

爾の時に秘密金剛手、復佛に白して言さく、世尊よ、佛の所說の如き、諸佛は常に平等三昧に住し、等しく衆生を視ること猶ほ一子の如しと、今は云何ぞ但國界主を守護すと言ふや、諸有の貧窮孤惸の困苦して依無く歸無く救無く護無きものを、何ぞ愍念し而も守護したまはざるや、爾の時に如來無上調御、秘密金剛手に告げて言はく、善男子よ、諦かに聽け、諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし、諸佛如來は平等三昧に住せざるにあらず、平等に由るが故に國王を守護す、善男子よ、譬へば良醫の小さき嬰孩を見るに身疾病に縈り醫藥に勝へず、乃ち良藥を以て母に之を服せしめ、母の服藥の力及び乳に由つて、其の子乳を飲まば疾病皆除かるが如く、諸佛如來も亦復是の如し、一切を哀愍して國土を守護す、若し國王を護れば七を護るの勝益あり、何等を七と爲す、所謂若し能く國王を守護せば即ち是れ國の太子を守護するなり、若し太子を守護せば即ち大臣を守護するなり、若し大臣を守護せば即ち百姓を守護するなり、若し百姓を守護せば即ち庫藏を守護するなり、若し庫藏を守護せば即ち四兵を守護するなり、若し四兵を守護せば即ち隣國を守護するなり、若し能く是の如くせば一切皆安からん。

治法要旨

先儒遺稿

國郡の政を改むるに付ては、第一に天子柳營よりの大法に氣を付けて、是に背かぬを要とすべし。たとへいか〳〵と思はることにても、大法の上にて夫をせねば叶はぬことは、もとより止められず。是がよきと思ふことも、大法に背くことは始むべきことに非ず。屹度命せられたる大法にてなければ、上にもなし來られ、諸國にもなし來ることあり。是も猥になすことには非ざれども、大法にさへ背かず、上より不審の懸るべきことならずば、よきことを始め、あしきことをやめて、聊か苦しかるまじきことか。大法に背かぬことを、諸國一統になし來りたるにかゝはり、よきことを始めず、あしきことを止めずば國を治むる道に背き、結句上を貴ぶ道にあらじ。上の大法に背かず、其國の政を改めて、夫を上から咎められ、怪まれるは、是非もなきことなり。是をおそれて手を出さずば、心得違なるべし。但人みせだてに仰山になることをして、上から咎められ、怪まるゝは論の外なり。

又國天下の政の上、其先祖よりなし來りたることを、猥にかふべからず。されども全くかへぬことには非ず、能く吟味をし、道理のつまり、かへねばならぬことは、是をかふべし。卒爾に改めては、外よりも怪しみ、大臣も呑込み兼ね、家中も騷がしく、國政淺はかに成る也。扨昔より有ることは、一旦は尤もならぬ樣にみえても、かくれたる理あることなれば　卒爾には止め難し。又假令よからぬに極りた

ること迚も、我が一旦の知慮にて深々と改めず、古法を本として、理を正して改むるときは、國法新たにかはらずして、國人よく是を守り、子孫も卒爾に改むることをせず。能く永久に傳はるべし。愁じて元祖の君は、何れも明かなる者なれば、其大法は正しき事多し。夫より代々なし來る所、よほどづゝのかはり有ることなれば、其品々をよせ集め、代々の内のよきことを取り、あしき所を用ひずば、大體よろしき政と成るべし。其上の足らぬを增し、餘るを減らさば、先祖にも背かず、目立つこともなく、道理に叶ふべきことなり。

又大臣の得と納得あるを要とすべし。大臣を敬ふは國の禮なり。然れども、大臣の心得違たるを、其通りにもたれて居ては、國政亂れ、民の心離ることあるべし。大臣の心得違を正し、我道を行ふ意を、能く呑み込ますべし。是六ケしき樣なれど、我に道理正しく、眞實は深く、我意を立てずして、得と命あらば、大臣に成り居る程の人、などか呑込まぬこと有るべきや。必竟其あり來る格式を用ひて、うはけらにて尊み、其人を大切に思ふ心なく、深切にする氣なきに依て、大臣も上も親しむ心生せず、又上に道を尊み政を重んずる心薄く、たまたま道理を云ひ、政事を論ずるも、我意許り立て、我儘にする樣に見ゆるに依て、下も上に感ずること薄し。是故に大臣と反して、大臣も主命を用ひぬ樣になること多し。能々心得玉ふべきことなり。

又一國一天下の人の、俄かに難儀せぬ樣に心得て、萬事改むべし。舊きことにても、俄かに夫を止めて、渡世に後るゝもの有り。其代りの宜き渡世を拔き、得と合點させたる上に、夫を止むべきこと也。されども甚だわるきことは、夫は構はず早速止めねばならず。夫程にわるくなき迚も、是を止むれば、十人難儀して、百人の爲に成る事なれば、十人難儀構はれず、時に依つては、どかと改め難く、騷々しからぬ樣に、そろ〳〵直さねばならぬこと有り。然れども夫にかゝはり、甚だわるきを捨置くべからず。よきことを始むるも、又此通りなるべし。又一國にて止められども、天下殘らず止めにくきこと有り。其所をも考へて成るだけ行屆く樣にすべし。

道理の善惡に目を付けず、只上の利分許りを見て、有來りたることを卒爾にかふるは甚だ危し。結句上の爲にもならひで、下の痛となること多し。目前の小利に溺れて、永久の大害を忘るべからず。一時の小慈に溺れて、萬世の大不仁を忘るべからず。

よきことの内の、本と要とを失はずば、善の善なり。よくても本と要とを取り失ひ、輕きを重んじ、重きを輕んじてはすまず。

わるきことを止め、よきことをますには、能きと惡きとをはきと見分けて、能く見定めて改むべき事也。なま兵法は大疵の基とも云ふ通り、筋惡き學問を、ちくと許りしては、古人の語を聞きはいり、其心の本と、しかたの要をしらず。其かたを似せて、有來りたることを卒爾に改め、是を聖人の道を行ひ、國天下の政をよくすると心得ては、甚だあぶなきこと也、まして學問もなく、一旦の知惠にて政を改めては、猶更理に當らぬこと多かるべし。されば迚よからぬ政をも打捨て手をささぬことには非らず。

差懸り、國天下を治る身の、善惡を見分くるに、學問整ふを待つては居られず、先づ本と要とを知り、是を何卒見損ふまじと强く掌み玉ひ、古人の數を考へ、時の賢才の智を借り、我身の難儀氣のつまるを厭はず、色に溺れず、樂みに溺れず、最負荷擔なく、名聞利用を離れ玉ふべし。かくの如くならば、其善惡を見る玉ふこと、中らずといへども遠からず。善惡のはきと見えぬは、智の暗き故なれど、少しの智有りても、人欲と名聞にて取亂ること多し。恐るべきは此二つなり。

又我が智慧を慢じ、人の云ふことを受けぬを、自から強く警め玉ふべし、いか程智慧有りても。人の上に生れては、輕きこと迄には、とくと行渡らぬ者也。吾が智慧許りを頼まず、人の智を吾が智とするが誠の智なり。賢者とも云ふ程にてはなくとも、其國に勝れたる者、又は勤め馴れたる下臣に、其了簡をいはせて聞き夫をよく嚙み分けて、遠かに是を用ふべし。一國の事は、一國の人の云ふ處と好む處とを聞き、天下のことは、天下の人の云ふ處と好む所とを聞き、夫をよく聞き居けて、事をさばくときは、當らざること稀なり。人に聞きても、はきと分らぬときは、聖賢の書を披き見れば、ぴつたりと合ひたることはなくとも、其詞を讀む内に、今日の上の道理披けて來るもの也。兎角道理のすまぬことは、かな書の書なりとも、是をひろげて見れば、ふしぎに其理披くること有り。宋の趙普は朝廷の大事有る度に、必す論語を開いて是を讀み、其思慮を練りたることなり。譬へば詩を作る人の、趣向たちにくき時、詩集を披きみれば、其景に合ふ詩ならねど、他の詩を吟ずる内に、趣向を思ひ付くと同じ。自からの智を頼みては、其是非とみる處、理に當り難かるべし。

人君の身、文武を尊まぬ人も稀なり。又士民を救ふ心なき人も非す。然るに其國の貧きと、差懸りたる事の多きと二によりて、先づ其物入を省き、勝手を取直しにかゝり、勝手を取直したる上、差懸りたることを、しばらひたる後には、文教をも廣め、武備をも備へ、士民の貧をも救ふべきと心得たる方多し。此甚だ心得違ひなるべきか。勝手を取直すべき爲迚、文武を輕んじ、士民を苦しめては、治邦の根本くづれて、天の惡む所、人の嘲る處、國の災も計り難し。所謂身の肉を削りて口に食ひ、其飢を救ふなり。肉盡きぬれば身死す。何の飢を救ふに足らんや。然るに、是れ必竟文武を尊み、士民を愛する心薄く、目前の利を貪るより出づることなり。自から

顧て其誤を知り、國貧なれば迚、成だけ文武を捨つべからす。成だけ士民を愛すべし。此また立志の重き所なり。

武備を輕んずべからす。然れども武備有つて威勢さへ強ければ、政は宜しからでも、事濟むと思ふべからす。假令小國迚も武備有つて、士風するどなる許りにて德行薄き時は、甚だ心許なきこと也。まして四面打ちひらけて、四方につゝまれたる大國は、德を本とし教を先とし、法禁賞罰を正くし、武備財用ありて、守りを取失はぬときは、家中領分の者、殘らず上に懷き敬ひ、忠勤を先にして、我が立身を顧みず、憐み救ふ心深く成り、利欲の心薄く成り、其國より治まるなり。

此通りなれば、あの國こそ天下の守りと成るべき、向ふ者有るまじき國ぞと、常に天下の人に思ひ込まれ、此に依り天下の守りとも成るなり。德を捨て、教を輕しめ、政を怠り、刑を猥りにし、法をゆがめ、禮をゆるめては、家中領分の人も、上を親しまず、只面々の立身を望み、利欲の心ばかりになり、近國の人にもあの政にては、何とも合點行かぬと思はれては、少の仁政、幾の武備有りても、天下の守には心もとなし。時の天子柳營のかげにて、天下治まりおれば、かゝる國にても、急に變ることなけれども、その國のよわみとなることは、至極深く、末は猶更心もとなし。かくの如くならば、治國の本理に背き又國家の危を招き、近くは我身の耻辱、遠くは子孫の難儀を忘れたるに非すや。古へより此方國亡び身危き時に成つて　前非を悔んで返らぬ例、和漢の記錄に明かなり。怖るべし。謹むべし。

諸侯の身、道理を正しく守りて、公邊の首尾宜しく、或は上に信せられて、役人に仰付けらるゝを悅び美むことは、左あるべきことなれども、色々と繕ひ、賄賂追從して、是を求め望むは、鄙劣の至なり。かゝる鄙劣をして成りとも、何卒奉公勤め度しと思

ふは、忠なるに似たれども不忠也。君に事へんと欲して、先づ君を欺くは不忠の至極ならざらんや。諸侯の身として、上を敬ひ禮を盡すは、もとより第一のこと、扨各國郡を賜はり、夫を治むる職を受取りをるなれば、そこを大切に勤め、身を慎み政をよくし、學んで智を正しくし、教へて士民の文武を整へる。是にましたる忠あるべきや。殊にかの首尾よきを望み、役人となるを望む者、多くは身の飾り家の飾りの爲と思ひ、是を孝行と心得、かの君を欺き、義を失ふて虚名を求むるは、不孝の至りなることをしらず。是によりて志も立たず。たま〳〵立掛りたる志も、いつの程にか頽れ果て、しかも是をよきことゝ心得、か樣のことをせぬを偏窟あほうの樣に思ひなし、利名のみにはしりこみ、身は諸侯なれども、心は商人の有さまになりて、夫を淺猿しきとも思はず、只高位にほこり、自由に暮すを大名の身持と心得、甚だしきは賄賂の入用の爲に、士民をくるしめ、追從の爲にあほうなることをなすは、何ともすまぬことなり。かゝる諸侯は稀なるべけれども、たま〳〵は有る事なれば、かゝる有樣に成らぬ樣にと、隨分慎んで立志を固め玉へかし。

立志の大本は學問にあり。一日聖人の書を離れては、一日だけ其志ゆるむ。自分にはゆるむとは思はねども、弓いるものの一日懈ると、一日だけ中りの薄く成る如し。然れども、只廣く書を讀み、慰み同前に心得、はつきりと身に引付けよます、又よき師をあがめて、是に正されねば、志もゆがみ、其上すわり難かるべし。審かに大本の編に述ぶといへども大切なる事ゆへに、先づ其要を述ぶ。儒者の常言と聞捨て悔り玉ふべからず。（次續）

艮齋問話

十、心は一身の主宰

安積信

我心は一身の主宰萬事の根本なり心を執り定めざれば家に主人の無き如く、私慾蜂起して思はざる不善の事を爲すに至る。心の存せざるは戒慎の意薄く我儘より起る。高貴の人の前にては、坐を正し衣を整へ、敬心深きゆゑ過少し。家内妻子の間にては、誰畏るべき者なく、心に油斷あるゆゑ、自然と我儘になり、言語動作無理なる事多く生ずるなり。書經に丹朱の不善なる行を擧げ、丹朱の傲惟れ慢遊是れ好むと云ふ。傲は即ち我儘のことあり。平日家内妻子の間に居り天命を畏れ一物を失ふ亂之端と自ら戒め、非道の事あるまじきなり。一家の治まらざるは一身の脩まらざるより起る。一身の脩まらざるは心の正しからざるに在り、外に出で公朝の上に慎むとも、内に入り妻子の間に怠るは、外見を飾脩むるのみにて、實學とは謂ふべからず。尤も妻子婢僕の意に叶はざる事ある時、怒り甚しく度に過ぐれば大に道に乖く。人の不善を責めて已れ又不善に入る。怒は逆德にて大賢に非ざるよりは是非を辨せざるに至り易し。吾心を靜め血氣に動かざる樣に鎮定し。或は一二日を經て發すべし。急に發する時は、五分の怒は七分になり七分の怒は十分に至る。中庸を失ひ害を生ずる多し。顏子の怒を遷さずと云ふも只、室に怒り市に色あると云ふ如く、罪なき者に遷すのみに非ず。其節を過すも遷すと謂ふべし。易に忿を

懲すとあり。論語に一朝之忿其身を忘れ以て其親に及ぶとあり。家内のみならず世人と接するに、怒は尤も慎むべし。劉寛の熱羹に驚かず、牛弘の射牛を問はず、韓魏公の燃鬚は神色を變せず、呂東萊の躬自ら厚うして、薄く人を責むるの章を讀み、卞急の氣質を變ずるの類、皆後人の模範とすべし。

十一、讀書の効能

北魏の道武帝問ふ、何者か最も善く人の神智を益すべきや、李先云ふ唯書を讀む神智を益すべしと、古人稱して名言とす。五代唐の明宗も亦云ふ、吾儒生の經義を講ずるを聞くを喜ぶ、大に人の智思を開益すと、書は聖賢の言行を載する所なれば、自然と人の智識を開廣し、道義講明し、其益ある勿論なり。上下數千年の治亂興廢を通觀し、縱横數萬里の邦國風土を瞰覽し、心志を養ひ精神を長ず其樂又言ふべからず。歐陽修の詩に至哉天下樂、終日在二几案一と云ふ、吉田兼好の燈下に古人を友とすと云ふ此意なるべし。然るに初學の子弟は其樂の深きは知り難きゆゑ、中途にて廢するなり。數年の刻苦に忍耐する能はず、終身の樂を失ふ惜むべきに非ずや。殊に人君は、社稷生民の大任あることなれば、格別に學問は勤め玉ふべし。才智ありても學問なき人は、小事に明かにして大道に暗く、能く國を治むるは難かるべし。備前の芳烈公十四才の時、一夜五更に至るまで枕に就き玉はず、翌日侍官の其故を問ひ奉りしに、別の事に非ず、我大國を領し、既に十四才に及べども、如何にして治むべしと云ふ事を知らず。樣々と工夫すれども、國を治むるの良法見え難し。とかく學問にて智を開くに非ざればあたはずと云ふを漸く考付き、夫より心落付きて寢に就きたりとのたまひしは、古今の確言李先の語と符合して尊きことなり。李先は儒生なればさもあるべし。今は幼年にて此處を發明し玉ふは聰明絶倫と謂ふべし。後賢明の主と成り、大國を治め政事甚だ美なり。學問は人主の先務なること知るべし。然るに人君學問通明なれば、小人は迷惑するゆゑ、多くは勸めざる者あり。唐の仇士良と云ふ姦邪の臣、臨終の時子孫を聚めて、人君は閑暇ならしむべからず。常に奢靡を以て耳目を娛し、酒色に溺れしめば吾輩志を得べし。決して書を讀み儒生を近かしむべからず。人君治亂興廢の迹を見て、憂懼を知れば、吾輩は退けらるべしと云ふ。小人の姦計畏るべし。

十二、公道と公學

道は天下の公道なり。學は天下の公學なり。孔子孟子の得て私する所に非ず。博く天下の善を取るべし。書經に德無二常師一、主レ善爲レ師トとあれば、善の有る所は皆吾師なり。舜は大聖なり。猶邇言を察せり。孔子は大聖なり。三人行必有二吾師一と云ふ。然れば學は一家を墨守するに及ばず、道の存するは皆學と思ふべし。程朱の諸賢は勿論なり。陸象山、王陽明諸公の言も、其善なるは皆從ふべし。漢唐諸儒の說も取るべし。老莊申韓佛氏の言も、善なるは皆取るべし。愚夫愚婦の言も亦取るべし。かくの如く胸襟豁然大古今を包括する勢にて、志の高大ともいふべし。朱舜水云ふ、學問之道如レ治レ裘、選二其粹然者一而取レ之、若曰二吾某氏學吾某氏學一、則非二所謂博學審問之道一世。此語通會の論と謂ふべし。今の學者は門を別ち戶を分ち、各其識見を守り、朱子學と云へば、陸王の學は異端邪說と號し、其善なる所を概棄す。漢學と云はゞ、程朱の學を老佛の如くに排斥するは、各其學を主張せんと思ふより起り、天下に幾許もなき儒者の中にて、門戶の見を爭ひ、仇讐の如く思ふは、公平の道に非ざるに似たり。朱子は嚴毅方正の人にて、陸象山と大極の辨、鵝湖の論は合はざれども、象山を白鹿洞に招き、門人を集め講義を聽き、又象山に請ふて講義を文に綴りしは、人

の善を取る公平の道なり。象山も其門人朱子を議する者ある時、大に辨責せしこと文集に見えたり。されば學問の道は博く善を取るべし。然し實學に志篤き人の爲に云ふなり。志篤き人は人の善を取りて我善と成し活用するあり。故に申韓老佛の言にても、愚夫愚婦の言も、其善なる處皆我修省の資となるあり。上手の冶工は銅中より金を取るが如し。聖賢の言にても、活用なき者は下手の冶工精金を用ひ損じ鉛も同樣にするあり。

十三、佛法誹議すべからず

吾邦にて賢人忠臣名將と稱する平重盛、楠正成諸公の佛法信仰せしを詐議する者あれども、是は聖學昌明ならざる世に出しゆゑ自然と佛に入りたるなり。佛道に死生を解脫し安念を消除する工夫あり。凡そ士たる者種々の安念有りては私慾に惑ひ忠孝を行ふ能はず。死生を解脫せざれば、性命を惜みて敵を破るあたはず。佛道は空を貴んで倫理綱常は離れたる者なれども、重盛正成諸公は、其說に因て死生を忘れ、私慾を去り、忠孝を盡す。是能く佛說を活用して我實用にせしなり。滄浪童子の歌も、孔子の耳に入れば、人を導く善敎となり。陽虎の如き惡人の語も、孟子の說に入れば、國を治むる要言となれり。總て其人の用ひ方にて瓦礫も光明を放つなり。昔楚の大夫より燕の君へ書を奉らんとて、夜中筆を執りしに、燭明かならざれば、燭を持する者に燭を明かにせよと言はんと思ふて遂に燭の字を書したり。燕の君其の書を見て燭の字に至り通難きゆゑ、深く考ふるに燭は明かなるものなれば、國を治むるに明を以てすべしと云ふ隱語と思ひ、是れより賞罪を正うし賢才を上げ、下情を通せしかば、燕國大に治まれり。是大なる誤解なれども、其用ひ方より政事の資となれり。況や佛道は義理高妙なる者ゆゑ、重盛正成は其說を善く用ひ、虛を實にし人倫を離るゝ道にて、人倫を治むる功夫とせしなり。梁の武帝の如き佞佛とは霄壤の別あり。一概に誹謗すべからず。若し此諸公福田利益の說を信じ、極樂淨土に生れたきなんど、證據もなき空言を信ずる人には非ざるべし。此諸公聖人の道を深く學び玉ふならば其功德は更に廣大なるべし。惜いかな漢土にても白樂天、楊大年。蘇東坡は皆佛法信仰なり。是も重盛諸公と同じく、其善き所を取ると見えたり。樂天の翰林に在つて天子を諫爭せしこと、州郡の大守となり、能く民を治めしこと、楊大年、蘇東坡皆忠硬直亮の名臣あり。其佛法を信ずるは、倫理を離れ圓頂麻衣、座禪、觀望を信ずるに非ず。一概に誹議すべからず。世の學者孔子の道を學ぶと云へども、章句詞藝にのみ局促し、身心の功夫なき輩は、釋迦達磨には大に笑はるべし。

十四、小成と憍慢を戒む

人は小成に安じ驕慢の心を生ずべからず。身分不相應の願は益なし。又驕慢の心起る時は、事業は成り難し。齊の桓公天下の諸侯を葵丘に會せしは、覇業の盛を極めたり。此時桓公驕慢の氣露れしかば、諸侯叛くもの九ケ國なり。魏の曹操天子を擁し袁紹を亡し、荊州に入り劉琮を降し、其勢强大なりし時、蜀の劉璋より張松を使として歸屬せんと思ひしに、曹操驕慢の心生じ、張松を無禮にせしかば、張松怒り主人を勸め劉玄德を迎へたり。是に因て三分の勢成れり。長尾輝虎は上杉管領の職を受け、關東に入りし時、其勢强大にして八州の諸侯歸從す。然るに鎌倉八幡の祠にて、成田下總守拜伏せし頭高なりとて、扇を以て打ちしかば、諸侯忽ち叛きたり。輝虎は智勇絕倫、古今無雙の名將なり。若し此時心を降し諸侯を撫愛せば、必ず鹿を中原に爭ふべし。惜しき機會を失ひしなり。古の英雄すら驕慢の心あれば諸侯を失ふ。況や今の人をや。（次續）

聖地小湊のほとり

萩野慶三

聖此小湊！それは多年わがあこがれの的であつた。懐かしい床しいその名よ！。

天與の好機は惠まれた。昨年初夏五月七日、われ〳〵同僚五人の一行は房州勝浦で一泊し八日朝同處から上總興津まで汽車で往つて、そこからは乘合で小湊に向つた。オセンコロガシの邊は左は大海、右は山、一つ違へば高い斷崖から墜落せんず、實に危なかしい道路であつた。即興一首

聖誕遠距七百載　山光海色依舊麗
想起壯烈妙法戰　猛天震地鬼神哭

時觀にして切に大思剛毅の士を懐はざるを得なかつた。程なく名にし負ふ小湊に着く。

右に誕生寺の山門聳え、側に「聖誕七百年記念」の碑が建てられてある。左手には海近く數軒の茶店があり。茶店の老爺は

「今舟が出ますからお乘り下さい」といふ。ソコで先づ妙の浦、通稱鯛の浦を觀るべく濱に下る。

乘船場は大きな一枚岩で、網を繕らふて居る老漁夫が數人、舟夫が十人計り居つた。忽ち新鮮な、永久に新鮮な磯の香、海の匂ひが一行の面を撲つ。

用意成つた一隻にわれ〳〵五人と他の四五人が乘り移る。左右に櫓が各二挺、逞ましい筋骨をした赤銅色の舟夫は一斉に一種の懸け聲で調子を合せつゝ忽ち岸を距れて遠力早く東南の方向に漕ぎ進んだ。

一天晴朗、海も極めて穏やかである。

前方に海中に突起せる岩礁がある。可なり大きく平かで絶えずその周圍に白波が躍つて居る。その岩の上に鵜の群が、横列を布いて此方を向いて居るのは、まことに面白く正に一幅の活畫である。

越し方を顧れば、山門を中心にして高くはないが鬱然たる山を背にし、こなた小湊一灣の風光、掬するに堪へたるものがある。

舟は左轉して、繪のやうな小島と岩礁の中間に進んだ。舟は靜止した。舟夫は秋刀魚の糟漬にしたのを二寸餘りに刻んだ餌を紺碧の水に投じた。

水面からヒラ〳〵と水底へ銀色の餌が沈んでゆく。左舷に乘客はみな偏よつて一心に海中を睜める。この邊り深度は二十尋もありと。誰れかゞ叫んだ。

「ソラ來た！。そこに、こゝにも！。」瞬間、鯛が非常に素疾い速度で餌を攫つてゆく。電光石火面かも何の音もない。上から見た鯛の形は細くして恰も鯉でゝもあるやう。深碧の水中で、ほのかに青光を發するが如く見える。夢か、あらず。現つか、さりとてはその餘りに倏忽とした幻しでも見るかのやう。活けるわだつみの深い神秘な幽趣はかくてわれ〳〵の詩情を陵つたのであつた。

大聖ひとたびいでゝ、山光水色限りなき靈活の氣を加へ、面してさらにその慈悲盛德綿々幾百千年の後までも魚介に及べるを、眼のあたり見て、洵に感に打たれざるを得なかつた。

舟はやがて元の方へと漕ぎ歸る。舟夫の逞ましい風手骨格は樸々として快、ありし昔の大聖　剛健なる風神を偲ばせて、たゞ假そめの荒くれ男とのみは見られぬ思ひがしたのであつた。

漕ぎ歸る岸邊に集ふ兒童等を見ては、當年幼ない大聖が頑童と伍して、彼の汀此浦邊を馳騁しつゝ魚介を捕へ玉ひし姿などをも想ひ浮べたのであつた。永遠の大生命に耀く靈界の偉傑も、無邪氣に可憐に、父母君にまつはりながら月日を過された時のことゞも想像すると、末は大海となるべき深山の眞清水が、

木の葉がくれに谷間をチョロ〳〵流るゝそれにも比べられ、何ともいへぬ床しさ親しさを覺ゆるのであつた。

予は一昨々夏霊山身延に詣でゝ、大聖の生涯、特にその晩年を偲んだが、今好機を得て驢つてその降誕と幼時を追憶し、相照應して實に感無量なるを禁じ得ぬ次第であつた、

上陸して山門を入る。左手の小高い山の中腹に一小堂あり。これ實に大聖生誕の壹蹟なりと。お堂をめぐり佛前感慨、當年聖父母君大歓喜のさまも想はれて少時は立去るに忍びぬ想ひがした。

境内右手に御銅像がある。柔和忍辱の妙相を具し玉ふ。

眞正面に本堂があり、宏壯なるものである。暫らく祈念を凝し、更にわが隣家皆川氏の愛らしき赤子の、病篤くして兩親の日夜寢食を廢して看護せるを、渥き御加護の下に癒しめ玉へと熱禱したのであつた。

一巡觀覽の後、境内を出で茶店に小憩、西の方天津まで徒歩行を始めた。

道路は海に沿うて通じ、兩側に家が並んで居る。家の造りは何れも中々堅固に出來て居る。ところどころ魚屋があり、今とれたばかりの濱刺たる鰺、鰶など見るも爽快である。左手のある店には大鯨が横はつて居た。半商半漁の町のさま、如何にも面白い。

往くこと數丁、右手に聖父母君の御廟あり、同行者が急ぐため、街頭から遙拜して過ぎる。やゝ少時すると兩側の家はつきて、右は山、左は海に直ぐ接するところ、大きな岩が平らかに延びて波狀の起伏を處々に示し、漁師が水邊に立つてモリで魚を捕つて居る姿などノンビリと原始的で味ひが深い。

天津に近づいた頃、右手に畑がひらけ一面にレンゲ草が紫の毛氈を敷きつめ、空は一碧に晴れ渡り、向ふに見ゆる山の森は、ある處は蒼然として黑く、ある處は生々たる若葉が緑りの彩りを示して、初夏

各地教信

○東京統一團本部教報

△五月廿七日（第四日曜午後一時開會）「國團の心を高調せよ」桃木顧正、「日本海大海戰の實話（其の一）」海軍中將松村龍雄閣下。△六月三日（第一日曜午後一時開會）「宗教選擇の其準」本多總裁閣下、當日は晴天にて來會者百五十餘名。△仝十日（第二日曜午後一時開會）「懺悔と精進」和賀義見師、「發菩提心」長谷川義一師。△仝十五日（午後二時開會、地明會例會）「法華經の一偈一句」本多會長閣下、來會者八十餘名。△仝十七日（第三日曜午後一時開會）「佛子の自覺」本多總裁閣下、續々二時間に亘り思想國難打開の道は國民の反省自覺にある事を力説された。△仝廿四日（第四日曜午後一時開會）「國民奮起の時」桃木顧正、「日本海大海戰の實話（其の二）」松村龍雄閣下、松村中將は其の當時三笠艦副長であつた人で指令長官東郷元帥と共に始めから終りまで奮闘された方だけにそのお話は實戰を目に見る樣な觀じがした。△七月一日（第一日曜午後一時開會）「思想戰の正攻法と立正大師」本多總裁閣下。△仝八日（第二日曜午後一時開會）「いのちがけの宗教」子安宰丈師「運命を轉ずる力」文學士小西日喜師。△仝十一日（午後二時開會地明會例會）「法華の安心と得益」本多會長閣下、來會者九十餘名、當日は統一團創立已來の强信者、府下の大森町山谷に立正教會を建立正法宣傳に奮闘されつゝあつた大原亮氏が逝去されて其の本葬式が品川妙國寺で午前十時に執行された、大原氏を失つた事は團の爲にも大森妙道會立正教會の爲にも實に惜しい事だ、が然し立正教會の方は子息重雄氏それに熱心家西山喜太郎氏が居られるのでまた心强い處がある、地明會では當日會員一同が氏の爲に心ばかりの御回向を申上げた。

以　上

○別に統一團本部としては日曜講演會は例の通り夏期中自七月第三日曜至八月第四日曜休會しますが、更らに本年は思想運動として七月廿日午後六時より本郷の帝大佛教青年會館で思想問題大講演會を開きます、講師講題は左の通り。

一、日本海大海戰と思想問題
　　海軍中將　松村　龍雄氏
一、思想國難と立正大師
　　統一團總裁　本多日生閣下
主催は統一團本郷支部と本郷春木町青年團聯合でやる事になつてゐます、續いて七月廿四五、六の三日間に亘り統一團本部主催で統一團に於て夜七時より統一團員の思想洗練を目的として講演會を開催します講師及講題は次の如くです。

一、共產黨事件に就て
　　警視廳　浦川秀吉
一、思想問題に就て
　　海軍中將　佐藤鐵太郎
一、思想問題と佛教
　　大僧正　本多日生

以上、日曜講演の方は九月の第一日曜（九月二日）から開會致しますから其のおつもりで

お所でを願ひます、では皆様隨分お暑い時分ですからお厭ひなさいますやう、御機嫌よろしう！。（梶木記）

京都活動教報

△六月一日國光婦人會總會「若葉の御誤に就て」原田日勇了つて立花家一奴一行の萬歳落語等の余興あり會員一同に赤飯の饗應ありて頗る盛會午后五時一同喜々として散會す。△二日護正會「法華經講義」原田日勇△五日興道館「法華經講義」原田日勇△八日護正婦人會「元政上人の身延紀行」に就て」有田宏道△九日正行婦人會「自覺」原田日勇。△十三日宗祖會金光孝碩。△十五日修學院靜居庵「日蓮上人御傳」吉塚通暎。△十六日西陣興道館「思想問題解決の鍵」有田宏道。△十八日本山講演「形の信仰より精神の信仰へ」吉塚通暎國髓を拂へ荻原日道。△廿三日午后五時聽講會「法華經講義」本多日生猊下。△仝日午后七時牛於講堂精神教化大講演會杉村勇次郎閣下の直講後「佛法僧に關する法華經の秀句」本多日生猊下△仝日于治方店員講話「無名と別名」原田日勇、△廿八日岡山會墨語支。（麗陽）

京都活動通信

△一月八日本正寺二樂會藤宜後右の志願有田宏道信仰の要旨京藤義應△十一日本正寺婦人會初會新年の佛法金光孝碩我國將來の婦人細野陸軍少將米田旭鳳先生の筑前琵琶其他餘興ありて盛會なり。△二月八日本正寺二樂會心の變轉墨語支法悅的世活金光會長。△二月十日本正寺婦人會婦人の自覺金光孝碩。△二月十五日靜居庵日蓮上人傳吉塚通暎精神修養金光孝碩。△三月八日本正寺二樂會立正安國の精神吉塚通暎恩義の感念細野閣下。△三月十五日靜居庵日蓮上人傳吉塚通暎日蓮主義の使命金光孝碩。△十八日本正寺彼岸法要苦樂の行相原田本山部長。△三月二十六日本正寺監督布教開會の辭金光山主三世一貫の大道京藤布教師生活の原理としての佛教武田文學士。△四月八日本正寺二樂會日蓮主義墨語支釋尊御降誕に就て金光孝碩。△五月八日本正寺二樂會日蓮上人の教義墨語支多數集して正なるか荻原當正。△五月十日本正寺婦人會佛法の流布墨語支。△六月八日本正寺二樂會信仰と修養金光孝碩大勢嗔恚の思想陸軍少將細野閣下。△六月十日本正寺婦人會信後の世活金光孝碩。△六月十三日本山宗祖會思想國髓に直面して金光孝碩。△七月一日西加茂小學校同會の辭藤井校長物の世界と心の世界別所小三郎精神修養の第一步金光孝碩。△七月三日中西三郎宅日蓮上人の精操金光孝碩。△七月八日本正寺二樂會法華の信行有田布教師杉村國ト出演の苦なれ共臨時公務の爲欠席。△七月十日本正寺婦人會本尊の選擇に就て金光孝碩。（浴水記）

神戸教報

△四月廿七日午後七時より例月講話會開催道文講義、能井特命布教師。△五月六日午後一時より日ノ本子供會開催超人の囁、日暮光道氏、勇敢な、ベールの話、丹羽先生長者窮子の譬、日暮光道氏。△五月十二日午後一時牛より例月參詣日、修法後佛法信仰の動機、能井特命布教師。○ヵ月十八日より一週間當立正寺總代名村市次郎氏は御病氣平癒の御祈念あり。唱題の最中に逝去されたり。廿三日自宅に於て密葬せり。廿八日午後四時より本多大僧正猊下大導師の下に當立正寺にて本葬を行へり。願くは本住院眞淨日覺居士をして遠かに寂光の寶土に攀手誘導あらせ給へ南無妙法蓮華經。△廿八日午後七時より法華經研究會主催の下に時弊匡救大講演會開催、同會之辭、藤立第一神戸高女教頭、苦瓜惠三郎先生、我が國に於ける思想的國難と行き詰りを生ぜし主原因とその救治策、工學博士青柳愛司先生、時弊匡救と法華經大僧正本多日生猊下、講演終了後奥村陸軍少將發聲の下に隔座下の萬歳を三唱し解散。△六月三日午後一時牛より子供會開催、勉太郎の鼻丹羽先生、玉山の鯉物中尾先生、上城守直別中原先生。○六月三日午後七時より當立正寺總代辻俊幸氏愛嬢の第七回忌追善法要を營む、當夜は原田本山部長、荻原前部長、上田上人、御出席下された、我等は釋尊の後繼者なり。と題して萩原前本山部長の御說教あり。△六月十二日午後一時より例月參詣日、修養後、立正安國論論に就て熊井特命布教師。△六月二十五日午後〇時牛より神戸高等商業學校にて本多大僧正猊下の御講演ありたり。△仝日午後三時牛より藤立高女にて法華經要義を講ぜらる。仝日午後七時牛より立正寺にて日蓮主義大講演會開催、我等の文化陸軍少將奥村拓治閣下佛子の自覺大僧正本多日生猊下。△六月二十六日岡山藤三井造船工場にて御講演あり。七月十二日午後一時牛より例月參詣日、佛性に就て熊井特命布教師。△七月十六日午後七時牛よりはちす婦人會主催の下に修養大講演會開催、于供の教場として家庭、藤立第一神戸高女教頭若瓜惠三郎先生、法華經の三大說相本山部長原田日勇上人。

大阪教報

△六月八日蓮成寺にて立正安國論講義上田師。△十二日堂圓寺にて自我偈講義京藤師。△十七日蓮成寺にて信心の得益能井師。△二十二日堂圓寺にて自我偈講義京藤師佛教の眞髓上田師。△二十四日蓮成寺にて婦人會信心に關する聖語本多猊下夜大紙倶樂部にて現代思想と日蓮主義妹尾氏法華經の特色本多猊下。△二十七日杉本宅にて移り行く日本の姿京藤師何れも頗る盛會多大の効果を奏せり。

津山教報

△五月五日、青年會「自我偈講話」大川孝準師。△五月十日、津山高等洋服裁縫女學校修養講話「價値の考察」大川孝準師。△五月十二日、婦人會「心固ければ神の守り强し」大川孝準師。△五月十六日、學校修養講話「常識の涵養」大川孝準師。△五月二十二日、參詣日、「宗教的節操」大川孝準師△五月二十六日、釋尊御降誕會法要后「佛陀の大恩」大川孝準師。△六月二日、參詣日、「堅き信念」大川孝準師。△六月五日、青年會「自我偈講話」大川孝準師。△六月三日、于供會、「眼鏡屋の頓智」大川孝準師。△六月十二日、婦人會、「中道實相の信仰」大川孝準師。△六月十七日、于供會、「鬼の話」大川孝準師△六月廿二日、參詣日、「藏の財、身の財、心の財」大川孝準師。△七月一日、于供會、「馬賣の話」大川孝準師。

活動寫眞撮影興業

[illegible]

日蓮大聖人の御正傳映畫

[illegible]

一、卷數　二十卷見宮
一、撮影費　拾萬圓見宮
一、内容　御正傳にして信仰の要諦なる
一、綴方　[illegible]
一、切方　昭和三年十月末日限り
一、豫選者　[illegible]
一、決選者　本化各教團管長代表
一、審査料　[illegible]
一、入選外選者に[illegible]
一、本件の御問合せは[illegible]

立正活映株式會社

社寺建築設計監督

及臺灣檜材の安價提供

（三年以上水蓄乾燥材）

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候

（充分なる水蓄乾燥をなしたる臺檜最も優良なるも水蓄不充分なる臺檜は于割狂ひ等の缺陷多きものであります）

東京市麻谷區霞ヶ岡町十六番地
（明治神宮外苑内日本青年館正門前）

社寺工務所
（電話青山六〇二八番）

神奈川縣鶴見町
社寺工務所鶴見支所

福岡市外堅箱町馬出松原
社寺工務所福岡支所
（電話二二三〇番）

大阪市西區市岡町七十九番地
社寺工務所大阪支所
（電話西三二二四番）

臺灣檜材ノ六大特徴

一、耐久防腐
二、蟻害絶無
三、香氣清楚
四、木質堅緻
五、理整然木
六、木高雅色

昭和三年七月廿四日印刷納本
昭和三年八月一日發行（第四百一號）

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	送料共

統一廣告料		
表紙一頁	金貳拾圓	前金之事
半頁	金拾五圓	
四分一頁	金九圓	
一頁	金五圓	

不許複製

編輯兼發行人　小林順義
印刷人　鈴木日雄
印刷所　三益社
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所　統一發行所
振替東京五一〇七一番

東京府在原郡品川町南品川四百十二番地
名古屋市東區千種町字五反田五二番地

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

立正大師の功勳……本多日生
菩薩行に就て……本多日生
寶物集……平康頼
治法要旨……先儒遺稿
艮齋問話……安積信
日什大正師略傳……竹内日照
聖訓摘要……本多日生
⊙治法思國會創立　⊙各地教信

第三十三年九月號